

ホープ・カレッジでの 「現代日本のキリスト教理解」 の講義について

久山 道彦

1995年の秋学期に、ミシガン州
ホランドにあるホープ・カレッジ
で、本学との交換教授プログラム
に基づく客員教授として、二つの
講義を担当しました。一つは「日
本宗教思想史」であり、もう一つ
は、「現代日本のキリスト教理解」
でした。ここでは、毎週火曜と木
曜の午後3時から4時20分に行
った後者の講義について報告した
と思います。

この講義は、井上洋治神父の
『日本人とイエスの顔』の英訳
“The Face of Jesus in Japan”
をテキストとして、日本のキリス
ト教作家（英訳がある遠藤周作と
三浦綾子）の作品（『塩狩峠』、
『イエスの生涯』、『海と毒薬』、
『沈黙』、『氷点』）を読み、そ
のビデオ等を観ながら、日本の歴
史や文化を理解しつつ、日本人の
キリスト教受容の特徴を考えるこ
とを主眼としていました。登録学
生は僅か8名でしたが、Religion
Majorの熱心なクリスチャンの学
生がほとんどで、自分達のキリス
ト教理解と日本人のキリスト教理
解の違いや親近性を真剣に学んで
くれました。福音書研究史に話が

及ぶ時であれば、天台本覚思想と
キリスト教教理史における「ロゴ
ス・スペルマティコス」や「先行
的恩恵」の類似性、法然の称名念
仏とルターのsola fideの親近性
等を論ずる場合もあり、議論も活
発で、私の日本の精神史につい
ての理解を再検討するなかで、ア
メリカの学生自身のキリスト教理
解も問われるというように、私にと
っても極めて知的刺激に富んだも
のでした。

しかし、いつも楽しい議論ばかり
であったとは言えませんでした。
10月下旬には、学生と一緒に、遠
藤周作の『海と毒薬』を読み、ビ
デオを鑑賞しました。50年前、敗
戦間際の九州大学医学部における
アメリカ兵捕虜に対する生体解剖
事件を扱ったこの小説を教材にす
るには、かなりの熟慮と勇気を
要しました。しかし、昨年最後の
Indian summerの午後、キャン
パスの芝生に皆で腰をおろし、テ
キストを片手に穏やかに話し合
った時、彼らと日本人の「罪」意
識に関して、「良心」の麻痺という
普遍的・根源的な人間の問題と
して議論できたことは望外の喜
びでした。海外宣教に携わるこ
とを将来の希望としている数名
の学生は、この作品の登場人物
（戸田や勝呂）に、自らのキリス
ト教信仰をもって罪の自覚と救
済の希望を書簡形式で語るとい
う課題を見い出しました。彼ら
の学びが、異文化への鋭い洞察
力により自らの文化的背景への
内省を含みつつ、益々深められ
ていく事を祈りつつ、講義を進
めました。

また、その次の週には、『沈黙』を読み、ビデオを観ました。アメリカの「キリスト教」を当然のことと思ひ、他文化との接触においてキリスト教が直面した問題を考えた事もなかった学生にとっては、この小説自体がショッキングなものであり、そこで問われている問題が、「キリスト教文化」の中で、ある意味でキリスト教を無前提に自身の価値観と同一視していた自分自身への問いと重なったようでした。彼らが私の講義を契機として、文化と宗教の問題、キリスト教と多様な文化の問題をどのように理解していくのか、そして自分自身のキリスト教との精神的格闘を深めていくのか、楽しみであったと同時に、私も最大限の努力をして、彼らが自力で内なる考究を持続する手助けができるよう祈りながらの講義となりました。

11月中旬にテキストである『The Face of Jesus in Japan』を読み終えました。『沈黙』の重さに圧倒され、宣教師になる将来の夢に自信を失いかけていた学生が、テキストに引用されていた法然上人の『一枚起請文』の一節や、一遍の興願僧都への書簡の一部を読むに至り、長年苦しんでいた自分の問題解決への光を見い出したと打ち明けてくれたことは、私の教師としての歩みの上で、最も深い感銘を受けた経験でした。このことは、1月29日にホープ・カレッジの教職員の前で行った「ホープ・カレッジと明治学院の交換教授の成果について」と題した総括報告（『白金通信』1996年5月号に全

文掲載）でも述べました。

また、学生達が課題図書であることを忘れたかの如く愛読してくれたのは、三浦綾子の『氷点』でした。「原罪」というテーマを彼ら自身の問題として捉え、特に彼らにとっても深刻な家庭の問題、親子や夫婦の愛情の問題を日米の文化の差異を認識しながら討論できたことは、私にとっても収穫に思えました。

講義も終わりに近づいた12月には、日本人とキリスト教の問題を、M. Honda氏の論文“Christian in the Buddhistic Climate of Japan”や、武藤一雄先生の論文「キリスト教と無の思想」の英訳“Christianity and the Notion of Nothingness”から、彼らが自らの力で学びとってくれました。これらの難しい論文は、Undergraduate のレベルではどうかと案じていましたが、彼らは、それまでのテキストと小説とビデオを通した学びから、理論的な考察へとまとめてくれました。少人数のクラスでしたが、それだけ学生達との交わりも密度が濃かったのか、自身の生育歴や信仰の軌跡への考察を交えながら、この秋学期の学びを綴った極めて実存的な Final Paper は、どれも読みながら感動させられることの多いものでした。

講義終了後、わざわざE-mailで御礼を述べてくれたり、クリスマス・カードを手渡してくれる学生もあり、更には、帰国前に、学生達との「お別れ日本食パーティー」をした時に、なんと吹雪の中、わざわざデトロイトから車を3時間

も運転して駆けつけて来てくれた
学生もあり、感激しました。

さて、以上のような内容のこの
講義で、多くのことを体験しまし
たが、英語があまり上手くもない、
一介の客員教員に対しても真剣に
応答してくれた彼らに出逢えたこ
とこそ、この交換教授プログラム
において私が得た最高の成果の一
つと言って良いように思えます。

(くやま みちひこ

所員、一般教育部助教授)